

会でも日本体育学会でも、また今日の支部活動の活性化・普及の土台を築くことはできなかったのではなからうか。今日の同志会の発展は、同志会創立50年史に見られるように、苦難の曲折をたどりながらも大筋の方向性として、また教育内容研究の質的發展において、系統性研究と実践の成果を抜きには語れないのではないだろうか。

系統性指導に潜む魔物

同志会の中で、一時期「系統性の一人歩き」とか「うまくしてどうする」という言葉が流行したことがある。

本当に系統性は一人歩きのものだろうか。もし一人歩きがあるとすれば、系統性を利用してゐる指導者（教師）の側に問題はないのであろうか。もちろん系統性は絶えず発展させ、実践的積み上げによって常に改変していくことは当然のことである。

同志会の創立者である丹下氏に、60年に病床に臥す前に「中村、荒木、ちよつと来い」と呼びつけられて、系統性研究はやつても良いが、系統は絶対に作るなよ」と懇々と諭されたことを今でも鮮明に記憶しているし、中村氏もあの頃はつらかつたなあと思感をもらしている。

再度繰り返しておきたい。

もちろん系統性を理解してなかったり、十分に系統性を咀嚼しないままに指導したのでは、子どもたちが信用して意欲的に学習するはずもないし、教師自身が十分な理解なしに系統性の指導を意欲的に実践に生かすことなどとても考えられる問題ではないと言える。

まとめに代えて

体育同志会の発展と支部の立ち上げや教育内容の進化に、「系統性研究と確立」を抜きには考えられないと思うが、「系統性指導に潜む魔物」の項で述べたように、一面では教師の形式主義・画一主義またはマニュアル主義に陥る危険性を常にはらんでいる。

奇しくも丹下氏が生前に予測し、発展過程の中で提起された「系統の一人歩き」に代表されるように、如何に立派な系統を作成しても、教師の研究と指導努力なしには、それを結実させることは不可能である。だからこそ教師の自由な研究の保障、個人で解決困難な学校教育の指導では、学校集団による集団研究の保障と制度の確立が望まれるのである。

科学的に研究され組織された系統指導であっても、時

丹下氏は、戦前・戦中に行われていた「体錬科・体操科」の画一的な指導内容の反省と慙愧の念にさいなまれていたのではないかと、推測している。

系統性の一人歩きが指摘されたことは、同志会研究の健全性を示すバロメーターであろうし、一人歩きをさせない努力を続けることが、系統性研究の発展を促す起爆剤となり、創造的・個性的適応を促すものと考ええる。系統性研究に関わってきた一人として、系統性の一人歩きや形式的適用・画一的適用に陥らないように、これまでも鋭意努力してきたし、現在でもどのように発展されることが創造的適応になるか、たゆまない努力と工夫を重ねて、実践研究の実証を怠らないようにしている。

系統性の一人歩きや画一的指導は、系統性の一面的な理解や自分の経験の範囲内での適用であったりして、自己撞着に陥っていることに気づかないままに形のみ追い求めるような指導を繰り返しているのではないだろうか。私は「形態や現象的には変わっても、質的に発展できる技術」を基礎として提起しているものであって、ドル平の型だとか、2対0の形式的あり方が基礎または基礎的内容だとは全く述べてないし、繰り返し「質的に発展できる内容・技術」としているので、誤解がないように

代の進歩と共に発展する諸科学の発展と無関係に存在することは不可能である。

教育方法、教育の系統性研究は、対象となる子どもたちが日々発達し、学習を重ねることによって次々と質的な変化・発展を遂げるのであるから、子どもたちの発達に呼応して教師の側の変革と指導法の発展が絶え間なく要求されるのである。

系統指導を理解し繰り返すことによって、子どもたちの質的発達がより鋭く、そして詳しく読み取ることができるようになる。実践によって教師の指導力が向上し、それらを総合的にまとめ次の指導に活かせるようになってきた時に、次々と新しい指導方法を生み出し、新しい課題解決の方法を発見できるので、教育・指導は限りなく面白いし、さらに個性的な発達と指導力の向上を促すのである。